

## 卒業生に聞く

*Interview with a Graduate*

「第九回」

光はとても強いメディア

光によってさまざまなことを

多くの人たちに伝えたい

# 石井幹子

一九六二年  
美術学部工芸科図案計画専攻卒業



## プロダクトデザイナーに あこがれて

私は一九五八年、藝大美術学部工芸科の図案計画専攻に入りました。ここではグラフィックデザインとプロダクトデザインを学べ、一年と二年はどちらも同じカリキュラムでしたが、私は三年になってプロダクトデザインを専攻しました。このクラスは一人三人行いで、そのうち女性は三人だけでした。

私は高校生のころから、プロダクトデザイナーになりたいと思っていました。といいますのは、高校一年ぐらいのとき、国立近代美術館で開かれた「グロピウスとバウハウス」という展覧会を観て、こんな素晴らしい仕事をする人たちがいるのか、と感嘆したのです。もともと、モノをつくりたい絵を描くのが好きでしたが、画家や彫刻家になるような才能はないので、デザインという分野が自分に合っているのでは、と思っていたのです。

それに理科も大好きで、学校で工場見学などがありますと、うれしく興味津々でした。小学校で石鹸工場を見学したときもおもしろかったし、中学校のときコップ製作工場でガラスのコップがベルトの上をどんどん流れていくのを見て、わあ、すごいと感動。そこへ「グロピウスとバウハウス」ですから、もうぜったいプロダクトデザイナーになりたいと思ってしまうのです。

## バンカラだった藝大

私は小学校からお茶の水女子大の附属で、高校も女子高でしたから、藝大に入ってみると驚きましたねえ。たいへんなバンカラで、みんな授業なんかあまり出て来ないんです。優秀な人ほど来ない。ところが芸術祭にきち



右：2012年に開通した東京ゲートブリッジのライトアップ。側面に設置した886基のLEDにより月ごとにメインカラーが変わる。  
左：日独交流150周年記念イベント「平和の光のメッセージ」（2011年）。ベルリンのブランデンブルク門を、48種の言語による「平和」の文字で埋め尽くした。

んとした作品を出せば大威張りできる。芸術祭では、皆が作品を出して講評をしゃべったりして、学生同士が切磋琢磨するという藝大のよき伝統も、校風として残っていましたね。先生方も手取り足取り教えるのではなく、学生同士勝手に勉強せよ、といった感じでした。それに、油絵、日本画、彫刻、木工、金工、陶芸、リトグラフ、写真など、実技については、実際に制作をしながら一通りのことを学ぶことができ、これはたいへんよかったです。

私は実務的なことも覚えたかったので、早いころから渡辺力さんの事務所アルバイトをさせていただいたのです。そこでは図面の引き方や、模型の作り方など基礎的なことをいろいろ学ぶことができました。

そういえば、陶芸のクラスでは、窯が上野動物園のすぐ近くにあるので、一晩、皆で薪をくべたりして窯を囲んで徹夜するんです。ライオンの鳴き声が聞こえてきて、ワクワクしてね。夜の動物園を身近に感じるのもスリルに満ちて楽しいものでした。こんなふうに、藝大時代は学校の内外で充実した日々を送ることができました。

## 照明をめざしてフィンランドへ

卒業した一九六二年、渡辺力さんが主宰されていたプロダクトデザインの事務所Qデザインナーズに勤めました。そこでは、家具、醤油ビン、茶碗などの日用品から展覧会のセッティングまで、いろいろなデザインを経験できました。当時は、デザインというものの勃興期で仕事も多く、三年勤めた間に実に多くのものをつくる経験に恵まれました。

このとき、たまたま住宅用の照明器具をデザインする仕事を与えられたんです。その試作品ができて、スイッチを入れてぱつと光が

灯ったとき、私は心がふるえました。形でも色彩でも、すべて光があるからこそ。視覚の世界は光によって初めて成り立つのだ、光って素晴らしい、と感動したのです。

照明デザインをもっと勉強しようと思いはじめたとき、たまたま北欧で発行されたデザイン書に出会いました。給料の半分もする高価な本でしたが、思い切って買いました。そこに私がとても心をひかれた照明器具が紹介されていたのです。それをデザインしたのはフィンランドのリーサ・ヨハンソン・パッベさんという女性でした。

私はパッベさんに英文で手紙を書いて、自分の作品集を同封し、私をアシスタントとして雇ってください、とお願いしたのです。すると、どうぞいらしてくださいという返事が来ました。うれしかったですね。当時一ドルが三六〇円、初任給は一万五〇〇〇円の時代で、国外持ち出しは五〇〇ドルまで。外国で働きながら勉強するしかなかったのです。

一番安いシベリア経由で六日間かけてフィンランドに着きました。街ではどのお店も素晴らしいデザインのものばかり置いてあって、さすがにデザインの北欧だと感激したのをよく覚えています。

仕事自体は、日本に比べると条件もよく、ほんとうにラクでした。職場の皆さんも親切にしてくれ、恵まれた職場でした。パッベ先生はたいへん教育熱心で、パーティでの立ち居振る舞いにいたるまで教えていただいたり、お宅によばれているいろいろなお話をうかがったり。パッベ先生は私の恩師であり、フィンランドはいまでも私の第二の故郷となっています。

照明器具のデザインについてもよくわかってきたころ、ドイツの建築照明の設計会社の社長さんに紹介され、その人に誘われて、



左上：和と洋、古さと新しさが融合した倉敷美観地区のライトアップは、4月～9月の日没から22時までと、10月～3月の日没から21時まで 左下：世界遺産の飛騨白川郷では、毎年、日程を決めて夜間のライトアップをしている。照明時間は、17:30～19:30 右：東京タワーのダイヤモンドヴェールのライトアップ。総ライト数276台で17段の光の階層がそれぞれ7色に輝く。

デュッセルドルフに行きました。そこで実際に目にした建築空間の照明は素晴らしい、たいへん刺激的なものでした。先方からスカウトされたのでパッベ先生にご相談して、ここで働くことにしました。

ちょうどドイツも戦後復興期でしたから、仕事はおもしろいほどたくさんあり、教会や劇場ロビーの照明、百貨店の外装照明、ショールーム、病院、銀行と、いろいろな空間の照明を手がけることができました。

## 京都を照らし回る

### ——ライトアップ事始

日本に戻ってくると、一九六八年に自分の事務所をつくりました。当時、著名な建築家たちが新しい試みをしようとしているときで、彼らと仕事をするチャンスに恵まれ、一九七〇年の大阪万博では夜景を演出することができたりと、仕事は順調に進んでいきました。ところが一九七三年にオイルショックとなり、夜はほとんど照明が消されて、省エネの時代を迎えるわけです。仕事もなくなってきた、どうしたらよいかと思索していました。

幸運なことに、二年後に沖縄の本土復帰を記念して海洋博が開催され、その会場全体の照明を担当するという仕事にめぐり合えたのです。やがてアメリカから大きな仕事が入り込んで、中近東のビッグプロジェクトに参加し、これを契機に国外での仕事が増えて、海外出張に明け暮れる日々となったのです。

でも、当時まだ日本では照明の文化は貧しいものでした。一九七八年に京都で国際照明学会が開かれるというので、夜、京都タワーに昇って調べてみると、あたりは真っ暗で明るいところはパチンコ屋ばかり(笑)。これではいけないと、そのとき私とった行動は、

実に藝大の四年間にたいへん負っていると思うのです。まずやりたいことは自分でやるしかない、ひとりで「京都市景観照明計画」をつくって、いきなり「こんにちは」と、市役所を訪ねてプレゼンしました。係員や課長さんもこれには困ってしまつて（笑）。

では、実際に光を照らしてみればわかつてもらえるだろうと、今度は「環境照明研究会」なるものを立ちあげて、電源車や照明器具を借り込み、いちばん目立つ平安神宮や二条城などに、「こちらは環境照明研究会です。景観照明の実験をしたいのです。敷地には入りません、光を当てるだけです」と頼みに行つたのです。平安神宮は、いったん許可してくれたのに、当日ダメと言つてきたりと、いろいろありましたが、とにかくなんとか照明実現にこぎつきました。皆さんたくさん見に来つてきて、新聞社も取材に来ました。

これに意を強くして、ライトアップ・キャラバンと称し、札幌、仙台、金沢、大阪、広島、熊本……いろいろな街で照らしつづけた。全部手弁当です。そして八年目の一九八六年、横浜市からライトアップ・フェスティバルの依頼があつたのです。これは八〇万人という人出となつて大成功。照明費用の安さにも驚かれました。これが日本のライトアップ事始となつたわけです。

その後一九八九年に横浜ベイブリッジや東京タワーのライトアップを手がけたことを契機に、ようやく日本でも照明という文化が市民権を得てきました。照明の仕事は億単位の予算のものもあり、公の仕事ですから失敗は許されません。そして「きれいだつた」「よかつた」と言つていただけるものをつくらなくてはならない。電気代も可能なかぎり少なくして効果を上げるようにし、三・一一以降は太陽光発電も積極的に活用しています。



今後も地方都市の照明計画や、オリンピックをめざして隅田川にかかる橋のライトアップなど、たくさんプロジェクトが控えています。

## 日本の文化を光でアピール

二〇一一年に日独交流一五〇周年記念で、ブランデンブルク門を舞台にしたイベント「平和の光のメッセージ」を開催し、二〇一四年には日本・スイス国交樹立一五〇周年記念で光のイベントを行うなど、海外に向けて日本から光によるメッセージを送るイベントを積極的に進めています。光は非常に強いメディアなのです。都市の街頭やオープンスペースでは、何万という人たちが見てくれる。それがきっかけとなつて日本に興味や関心を持つてくれたらいいな、と思うのです。

こうした外国でのイベントは、娘のリーサ<sup>あかり</sup>明理との共同プロジェクトです。彼女も藝大の美術学部でお世話になり、卒業後パリのデザイン学校で勉強し、やはり照明デザイナーとなつて、現在はパリに事務所を持っています。親子ともども照明デザイナーとしてお役に立てるのは、たいへん幸せなことだと感謝しております。

石井幹子（いしい・もとこ）

一九三八年東京生まれ。照明デザイナー。都市照明から光のパフォーマンスまで幅広く活躍。光文化フォーラム代表として国内外の光文化の継承・発展にも力を注ぐ。主な照明作品に、東京タワー、レインボーブリッジ、白川郷合掌集落、上海ワールドフィナンシャルセンターなど。著書に『LOVE THE LIGHT, LOVE THE LIFE 時空を超える光を創る』（東京新聞出版局）、『光が照らす未来―照明デザイナーの仕事』（岩波書店）、『光時空』（求龍堂）など。北米照明学会会員、国際照明デザイナー協会特別会員。